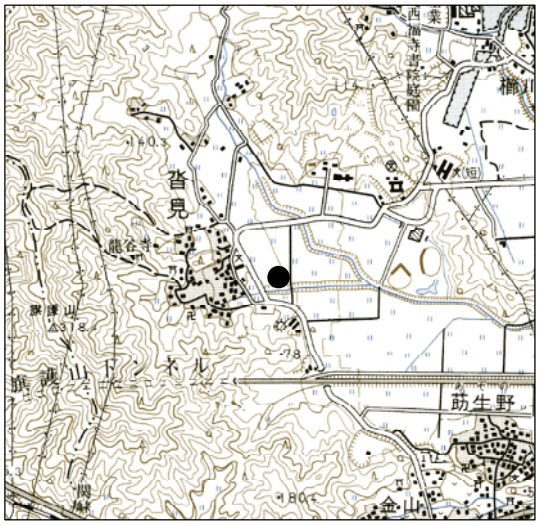
21. 沓見遺跡（くつみいせき）

所 在 地：敦賀市沓見
調査原因：経営体育成基盤整備事業（ほ場）
調査期間：令和元年 11 月 1 日～12 月 27 日
調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
調査面積：2,000 ㎡
時　　代：古代、中世



位置図（S＝1/50,000）

調査の概要　沓見遺跡は敦賀平野の西部、三味線川の支流である五反田川が形成した扇状地の扇央部にあります。古墳時代から中世の遺物散布地として知られ、現状は水田・畑地でした。今回の調査は、ほ場整備に伴うため池工事によるもので、令和元年度は工事範囲のうち 2,000 ㎡を対象に調査をおこないました。

遺構・遺物　調査の結果、河川の跡が２条みつかりました（NR１・２）。

NR1 は調査区の北側でみつかりました。両端は調査区の外へと延びています。幅は最大６m、深さは 0.5m以上あります。周囲には網目状に無数の小さな川が広がり、上層に黒い粘土が堆積していることから、比較的流れの緩やかな川だったことがわかります。川の中からは、平安時代頃（約 1000～900 年前）の土器（須恵器・製塩土器・白磁など）がみつかりました。

NR2 は調査区の北東端でみつかりました。江戸時代から明治時代ころの川の跡で、陶磁器や瓦がみつかりました。

ほかに、直径 20～30cm ほどの小穴が 19 基みつかりましたが、遺物もなく、時期や性格は不明です。また、建物を構成するようなものもありませんでした。

まとめ　土器のみつかった状況や、調査区内で明確な生活の痕跡がみとめられなかったことから、平安時代から鎌倉時代にかけての集落は、おそらく調査区の上流側（西側）の現沓見集落周辺にあったと考えられます。　（安達俊一）

須恵器坏

須恵器甕

須恵器甕

製塩土器

白磁椀

調査区遠景（東から）